



「『本邦民間鋳業初の海外(フランス)留学生』  
松江出身の住友別子銅山・鋳山技師

# 塩野 門之助 補遺

## ― 事績と資料 ―

田 中 隆 二

### 目次

はしがき

- 一、赤山二本松と旧主・塩野門之助
- 二、塩野門之助と「双松会」
- 三、塩野門之助令孫・井田康子氏手記
- 四、塩野門之助縁者等の写真
- 付録 住友別子銅山記念館に保管されるようになったラロツクの写真
- 五、知人からの手紙など
- むすび

はしがき

塩野門之助の業績は住友別子銅山・鋳山技師としてのそれにつき  
 ると思われる。これに加えるべきものがあるとすれば、二度の住友  
 勤めの間にあつた、古河足尾銅山・鋳山技師としての彼の活躍であ  
 る。いずれにしても、鋳山技師として彼は業績をあげたのであり、  
 フランスとの関係は言及され続けられるであろうが、彼の仕事の専  
 門的評価は今後より詳細に行われるべきである。これまでの塩野門  
 之助についての調査・研究は、その点で十分でない。

稿者は、その方面では、残念ながら、全くその任にたえない。従つ  
 て、この「補遺」も、塩野門之助の鋳山技師としての専門領域では、  
 何も応えるべきものを有していない。このことを稿者はおことわり

して置かねばならない。

しかし、塩野門之助の事績は、そうした、言わば「専門的」あるいは「技術的」または「具体的」「物理的」な分野に留っていないように稿者には考えられる。

その事績は、彼の故郷の屋敷内にあつた二本の松を介して永続している、より「象徴的」かつ「精神的」なもの、更には子孫・縁者知人・後輩達の記憶に焼きついている塩野門之助の生き様、彼の風貌としても存在していると思われる。

このように述べると、人は稿者を批判するかもしれない。「恣意的な解釈に過ぎない」と。たとえ酷評であっても、稿者はそれを甘受しよう。しかし、この「補遺」は先の「事績」のそれとして、是非公表して置きたいのである。ここに掲載するものの中には、些事としてかえりみられない種類のものもあるであろう。しかし、それらとて、考え方によつては、塩野門之助の「技術的」な業績よりもはるかに重要で、しかもより恒久的な影響を示していると稿者には想像されるのである。

次に、目次に記した順序で、そうした塩野門之助の事績について述べ、資料を紹介する。

#### 一、赤山二本松と旧主・塩野門之助

稿者が塩野門之助についてまとまった知識を得たのは、前篇<sup>(1)</sup>「事績」に記した通り、矢部兵之助「松江中学の二本松と旧主塩野門之助」による。その書の第一章「赤山二本松とその樹令」冒頭に、

本年は赤山に松江中学が移転されてから七十年目にあたり、来年は学校創設九十年にあたる。われら赤山で五年間学んだ若いころを偲ぶとき、必ずや長年風雪を凌いで天空に聳えていたあの二本松の雄姿が嶮の裡に浮ぶのである。

と、矢部氏は、その二本松が氏にとって、または氏の同窓の松江中学及びその後身の学校の出身者にとって、非常に感慨深いものであることを、まず述べて居られる。次いで、

あの場所は、もと松江藩士塩野家の屋敷であつた。

と記述を進め、その屋敷を含め附近の土地一帯が島根県によつて買収され、松江中学の新校舎建築用地となった経緯を語られ、当時屋敷及び二本松の所有者であつた塩野門之助と塩野家、更には塩野門之助の令嬢・令孫のことにも言及されている。そして、問題の二本松は、

本年五月、現在松江市立第一中学校の木島校長に二本松の測量を依頼したところ、

松の高さ

二五・七〇メートル

松の幹の周囲（胸の高さで）

三・三〇

および

三・二七

よつて直径は一メートル以上である。

松の生えている台地の高さ(校舎地並上) 二・九七

また、標題の「松の樹令」については、

県内名木の研究者・島根県林業試験場山本武敏氏が科学的に各方面からの推算の結果は百四十一百六十年とのことである。

と付記され、更に、

塩野家には先祖のこと、禄高のこと、松のことなど旧記録見当らず、僅に塩野氏遺族の幼時の微かな聞き覚えでは、松平家からあの屋敷を頂いたとのこと、また県立図書館の記録で門之助氏の祖父・園兵衛氏が松平家に始めて仕えたとのこと、以上二つから筆者は門之助氏生誕時に祖父君が五十才で、祖父君三十才で仕官して屋敷を頂き、樹令二十年の若松を記念に手植えされたと仮定すると、本年は松の樹令百五十二年となり、山本場長の推算とほぼ近い。

と意見を表明してこの章を締めくくられている。

ところで、二本松の樹令推定については、山本武敏(島根県林業試験場長)氏自身が、『島根新聞』昭和四十年十月十六日(土曜日)

(3)、同年同月十八日(月)(3)、十九日(火)(3)、標題

「二本松の樹令  
……思い出深い赤山の名木……」(上)、(中)、(下)で詳細に報告されている。紙幅

の都合で、その連載記事の紹介は割愛せざるを得ない。しかし、(下)で矢部氏の経歴と矢部氏が塩野門之助について先述の冊子を作成さ

れた理由について触れている部分は、本稿にとって特に重要であるので、左に掲載する。

なお、矢部兵之助は明治三十九年の松中卒だから西村先生よりも少なくとも十年は若いだろうが当年八十歳。一高から東大を経て大正二年、久原鋳業に入社をされ、終戦時は日本鋳業の常務で、藍綬褒章の受章者でもあるほどの人だが同じ鋳業界で、しかもわが国の製銅界に画期的な大偉業を成し遂げられた同じ松江出身の大先輩である故塩野門之助氏のことを記録して、後世に遺したいとの念願からか、草光先生が上京の折りの会談で、お約束になったことを生前に果たすことができたといつて喜んでおられた。このような意義深いことに一役買うことの機会を与えられた草光先生の温情にたいして、心から感謝をしている。

双松の天籟というべきか。

矢部氏自身は自著刊行の動機について、直接的な説明は控えて居られる。しかし、『松江中学の二本松と旧主塩野門之助』の「むすび」で左のように述べられている。塩野門之助の事績を顕彰し、赤山二本松の由来を語って、二本松の繁栄を願い、同時に同窓「双松会」の会員および「広く松江中学関係者」の活躍を期待しての労作であることはよく理解されるのである。

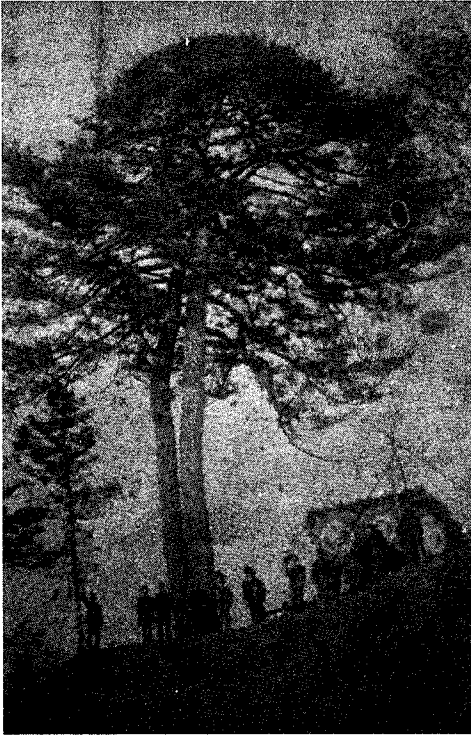
以上塩野氏の略歴と性格の一端を述べたが、要約すると

塩野門之助の切望によりて赤山二本松が保護され、すばらしい勇

姿は学校のシンボルとなり、卒業生の団体双松会の名となった。そして全氏の遺族達も、遺愛の松を見て遠き祖先の跡を偲び、この松に深き関心が今も続いている。

「むすび」には、このあと塩野門之助の事績が続く。しかし、それは我々も「事績」で既に試みたことであるので省略する。ただ、左の引用は付け加える。塩野門之助は銅製錬の、

その道で日本の大先輩であった。ここに松江中学移転七十年を機とし、知られざる、また忘れられた赤山二本松の由来と共に、旧主塩野門之助の実績を伝え、併せて塩野家と遺愛の二本松が永く繁栄することを、万余の双松会員および広く松江中学関係者と共に祈り度いのである。



山本武敏氏は『島根新聞』昭和四十一年三月二十六日(土)(3)に「赤山の二本松 ―その後のこと―」という題で投稿され、二本松の古い写真がみつかったことを報じられている。それが上掲の写真である。山本氏の説明を一部紹介して置く。

この写真は、門之助氏がこの地を譲渡された時、二本松の樹下で引渡しの小宴を開かれた時の記念写真だそうだが、この時の樹相から判断して、この写真がもう少し早く見つかっておれば正確な樹齢判定に役立つものをと悔まれた。というのは、どうやら私の前記の推計は少し甘かったようで、はじめ大体二百年と踏んで調べにとりかかった時の直感がより近い樹齢のように思われてならない……この写真は、昔、故岡虎次郎校長が山本家から借りて起雲館に陳列されて、その後も、暫くの間、校長室に掲げておられたことがあったそうだから、それは、おそらく六十周年の時ではなかったかと思われるが、今では古色蒼然として消えかかっているので、複写をして林業試験場の赤山会でも保存中である。

これで私の二本松についてのつとめは終わったようだが、最後に、右方の傾斜をした松には苔やのきしのぶが生えていることから、或は腐れが入っているかも知れないことを考えると、九十周年記念事業として計画されている二本松の保護対策によって、久遠の天籟が聞けることを一層強く願うとともに、九十周年に際して、山本家の写真が再び起雲館に出展されることを願いたい。

前掲の写真は、井田康子氏の御教示により、稿者が松江市南田町一二三番地の山本英夫・美穂子御夫妻を訪ね、門之助晩年の写真と一緒に拝借複写したものである。その時、この山本武敏氏の新聞記事の切り抜きもアルバムと共に借り受けコピーさせて頂いた。尚、写真は二枚とも『松江北高等学校百年史』二六五ページに掲載されている。

ところで、山本武敏氏の述べておられる九十周年、更に、稿末で次のように望んでおられた百周年については、次章で語ることになるが、百二十周年を待たずして、双松のうちの一本、しかも武敏氏が心配しておられた方でないものが枯れ、残りの一本への悪影響の危惧から伐採のやむなきに到った。後継の二本松が定められているとはいえ、残念至極である。

……この場所が、当分やかましい英才教育の場としての使命と機能を発揮し得るように性格づけられれば、問題の多い学区制の中の公立学校の教育問題も自然によくなくて、二本松の存在も一層意義深いものになるであろう。

赤山よ、どこへ行く。これは赤山に学んだ者だけの思いであつてよいだろうか。絶佳の教育環境こそ、来るべき百年祭に期して待つべきものと思う。

## 二、塩野門之助と「双松会」

塩野門之助は明治二十九年三月、山本貞利氏を代理として、樹木



のことは、前出『百年史』二六五ページに記載されている。また、その永世保存の条件については、矢部氏論稿では、

昔松江中学の歴史担当の上野富太郎先生の話によると、塩野氏はあの土地を県に譲渡する時、あの松を手離すのを深く惜しみ、「この二本松は吾家の祖先来の愛樹であつた、未永く大切に保護して貰いたい」と切望されたので、県は校舎の敷地造成にあたり、松の生えている場所は元の庭の地並そのままに台地として残し、松の根を保護したとのことである。……

と説明されている。しかし、『百年史』三四四ページに書いてある通り、

二本の松が「双松」として松江中学の象徴的存在として仰がれるようになったのは、しばらくのちのことである。次節でみるように卒業生の回想を検討しても、明治三〇年代の卒業生にはまだほとん

井戸を島根県に寄附している。そのうち松二本は永世保存を条件とし、その指定を県議会で議決して、松江中学に引き渡されたものである。その

ど意識されておらず、明治四〇年代の卒業生になって意識されはじめてくる。……

二本の松が「双松」として大きな意味を与えられるようになるのは、明治三十九年の創立三十年記念式、明治四十年の皇太子行啓のころからであったとみてよいように思われる。……(三四五ページ)

その証拠となり得るかどうかは別として、この章のはじめに掲げた『校友会雑誌』の特別号(第十六号)「学校創立第三十年記念号」(明治三十九年十二月)の表紙は、

二本松つまり「双松」と三〇年の歴史を象徴するその数の星を、赤地から白く染めぬいたデザインで、当時四年生の竹下茂家の作である。(『百年史』四三〇ページ)

創立三十周年記念祝賀の歌も作られ、その中に「千歳の松の二本は」とはに栄ゆるさがなれや」という歌詞がある。

記念式当日(明治三十九年十一月三日)生徒総代・第五学年小林寛三郎君の式詞に、「…校庭の双樹亭々として…」とあって、二本松への言及がある(『百年史』四三四ページ―四三五ページ)。

また、「双松」は校訓「質実剛健」の象徴となり、校訓が確定し、その象徴「双松」の意義が決定したのは、明治四十年五月である。

このことは『百年史』四四八ページ―四四九ページに書かれている。もともと「質実剛健」そのことについては四二五ページから既に記述があり、重視されている。

「双松」の由来は前記矢部氏のほかに、夙に、昭和二年一月の『紅陵』創立五十年記念号に、原巽教諭が述べて(『百年史』三四四ページ―三四五ページ)いて、それによると、塩野門之助の二本松に対する愛着は非常に強かったようである。

…仄聞するところによれば塩野氏は二本松を大切にしていられるなら石材位は寄付を厭はぬといつて居られるとのことである。何うかこれも五十年記念の一として実現を見たいものである。

と、その引用はむずばれているのである。

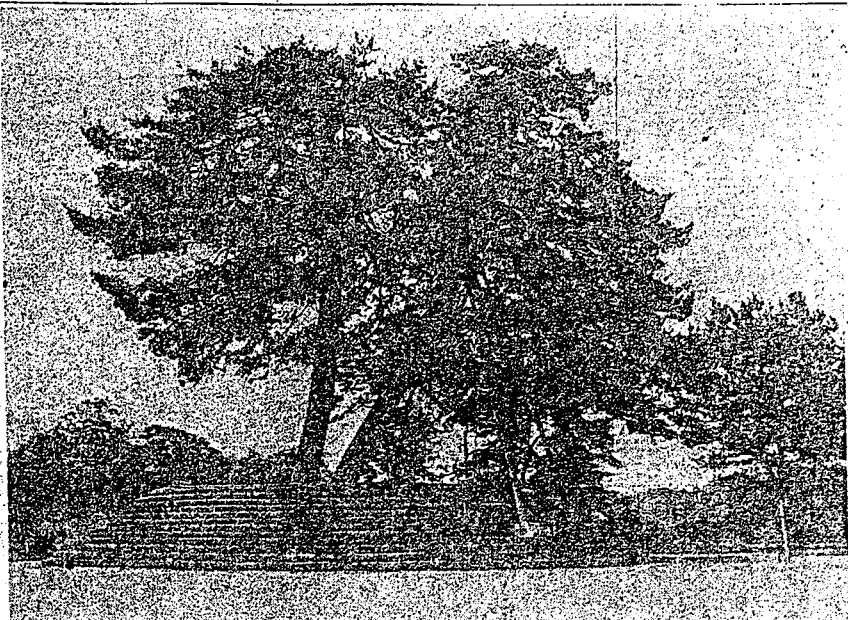
ところで、この「質実剛健」の象徴たる「双松」は、旧制県立松江中学校及びその後身の新制県立松江第一高等学校、県立第一、第二、市立の三高等学校を統合して出来た新制県立松江高等学校、現在の県立松江北高等学校の同窓会・「双松会」の名称の礎ともなっている。しかし、この「双松会」がいつ誕生したかは定かでない。誰の命名によるのかも明らかでない。初代の双松会会長の氏名を稿者は存知ない。こうしたことは是非知りたいので、教えて頂きたく、ここに記すしだいである。

それはさておき、昭和四十一年五月二十二日(日曜日)(6)、『島根新聞』は、旧制県立松江中学校創立九十周年記念式典については、大々的に報じている。

当時の双松会会長は田部長右衛門氏であった。

『百年史』によると、昭和二十四年四月、三校が統合して発足した、新制県立松江高等学校は、「北校舎」、「南校舎」に生徒を収容し

# 立九十周年記念式典



## 九十周年記念式を迎えて

双松会会長 田部 長右衛門



双松会創立九十周年を前に、本会が創立の経緯を振り返ると、明治二十九年(一八九六年)五月、東京府立第一中学校(現立川高等学校)の卒業生有志が、東京府立第一中学校の校舎内に「立松会」を組織した。これが本会の前身である。創立の目的は、同窓生の交誼を深め、教育の発展に貢献することである。以来、年々会員が増え、活動も盛んになり、昭和二十九年(一九五四年)に「双松会」と改称した。現在は、松江市内外に支部を設け、幅広い活動を行っている。

## 一本松の補強

◆記念事業の数々  
 本会では、創立九十周年を記念し、様々な事業を実施している。その一つが「一本松の補強」である。これは、松江市内の主要な幹線道路沿いに、一本松を植樹し、街並みを美しくするとともに、緑化を進めることである。また、同窓生による寄付による奨学金制度や、教育支援事業なども実施している。今後も、会員の力を結集し、社会に貢献していく方針である。



写真は赤山台の上の二本松と旧校旗

## 九十一年の歩み

- 一、創立九十周年記念式典(午後1時、一中体育館)
- 二、創立九十周年記念講演会(午後7時、立川高等学校)
- 三、創立九十周年記念文集の発行
- 四、創立九十周年記念行事の開催
- 五、創立九十周年記念式典の開催
- 六、創立九十周年記念式典の開催
- 七、創立九十周年記念式典の開催
- 八、創立九十周年記念式典の開催
- 九、創立九十周年記念式典の開催
- 十、創立九十周年記念式典の開催

## プログラム

- 1. 互礼
- 2. 開式の辞(本橋式典委員長)
- 3. 祝詞(田部双松会会長)
- 4. 物故者追悼(卒業生・生徒の遺族に献辞)
- 5. 祝詞(東京双松会会長)
- 6. 記念行事並びに事業経過報告(東京双松会副会長)
- 7. 祝詞(東京双松会会長)
- 8. 会歌(立松会)
- 9. 決議(東京双松会副会長)
- 10. 赤山健児の歌
- 11. 閉式の辞(馬場計副委員長)

双松会会長

田部長右衛門

松江市市長

齋藤 強

島根県教育委員会

曾田達雄

脇田裕

松江市教育委員会

佐次芳市

金山千

東京双松会

原邦道

近藤英明

近畿双松会

永岡孝二

立正嘉

松江相互銀行  
取締役社長

足立真重

松江信用金庫  
理事

柴田午朗

獨立松江北高等学校

岡磯吉

獨立松江南高等学校

飯塚一雄

田部林産有限

藤井金一郎

青戸陽一

青戸泰吉

松本尊行

水野豊之助

水野裕正

野坂慎

安部正一郎

三原徳重

中島干城

野津正三

四方正次

大芦寿夫

人見敦美

松本茂

松本功

佐和重美

金森伸夫

大町正武

伊野賢一

吉川浩一



# きょう旧制松江中学創



西村功太郎氏

**質実剛健**「モットー」に  
天下に鳴る西村式幸盛教育

校風を創った歴代校長群像

「質実剛健」は、西村式幸盛校長のモットーであり、本校の校風を創った歴代校長の共通の精神である。西村校長は、教育者としての使命感と責任感を持って、本校の発展に尽くされた。その精神は、歴代校長にも受け継がれ、今日まで本校の校風を形作ってきた。この校風は、生徒の人格形成と学業の進歩に大きく貢献している。歴代校長の功績を振り返ると、その偉業が改めて目撃される。彼らの努力と犠牲が、今日の松江中学を築き上げた。この校風を未来に引き継ぎ、さらに発展させることが、我々の使命である。

## 赤山健児の歌

1. 赤山健児の歌  
2. 赤山健児の歌  
3. 赤山健児の歌  
4. 赤山健児の歌  
5. 赤山健児の歌  
6. 赤山健児の歌  
7. 赤山健児の歌  
8. 赤山健児の歌  
9. 赤山健児の歌  
10. 赤山健児の歌

本校の創立九十周年にあたり、母校の発展と同窓生諸兄の御活躍を祈りつつ我々もその一人として皆様と共に母校の栄誉のために渾身の努力をこめてまいります。

内閣官房副長官  
衆議院議員

## 竹下 登

六一会一同

昭和五年卒業(第五十期)

昭五五会

細田 吉蔵  
今村 龜太郎

昭五五会 順不同

昭五五会 順不同

昭五五会 順不同

## 佐野 広

昭五五会

昭12	森江喜治
昭11	三谷敏夫
昭10	中島敏夫
昭8	野津一郎
昭8	尾崎五郎
昭8	石倉正樹
昭6	清水正樹
昭5	清野正樹
昭2	米田正樹
大14	高橋富士郎
大13	伊野正樹
大12	田野俊彦
大7	飯塚忠治
大6	佐野文彦
大5	四方京一
大3	波谷久
大2	田中弘道
明41	古瀬麻
明41	吉田武雄
明40	吉本亮一
明38	佐藤信雄
明36	福岡勝吉

## 松江市医師会

### 双松会会員(氏名と数字は卒業年)

昭15	樋口通守
昭15	浅野
昭15	長沢文治
昭16	西尾康四郎
昭16	星野壯治
昭16	中島雪夫
昭16	嘉戸敏良
昭17	古瀬
昭17	小竹原秀雄
昭18	高尾英吉
昭18	久保田洋三
昭18	吉岡晃郎
昭19	福田俊正
昭19	梅津重忠
昭19	日高輝男
昭19	木村正也
昭19	福庭幸男
昭19	三上義昭
昭19	都谷義行
昭20	山崎俊行
昭20	佐野義和
昭20	門脇理男
昭23	佐藤充男

## 岡崎 功

学校法人 松南学園  
松南高等学校 校長

## 原田創美堂

TEL 045-1100

松江 本店

## 松江旅館組合

### 双松会 会員

水・明 井上繁吉  
岩多屋 岩田耕周  
臨水新館 西尾奎二郎  
一文字屋ホテル 景山一暁  
なにわ旅館 勝谷哲也  
魚一 吉村一夫  
丸一旅館 園山亮  
蓬萊荘 常松仁一  
ときわ旅館 山田市次郎  
松崎水亭 松崎定夫  
つるや旅館 福島益太郎  
ホテルみしま 三島善階  
皆美館 皆美健夫

## ニチポ一 スクールウェア

ニチポ一 ビニロントレーニングシャツ/タイツ  
ニチポ一 ビニロントレーニングパンツ/ショートパンツ  
ニチポ一 ビニロン柔道衣  
ニチポ一 スクールセーター  
ニチポ一 シャツブラウス

セーイの総合メーカーニチポ一は、豊かな経験と最新の技術をすぐれたアイデアで生かしてみなさまの衣生活にご奉仕しております。

ニチポ一 代理店  
K-K 泉本店 社長 泉 彬

## 松江市医師会

昭五五会



ていた。「北校舎」は松江第一高等学校。「南校舎」は松江第二高等学校であった。しかし、旧一高の過去の火災、三校統合によって生徒数が千八百名を越えたことなど、種々の問題があった。それで、元県立女学校跡であった西川津の地に新校舎を建築し、昭和二十五年十月、実質統合をみたのであった。従って、明治九年創立の県立松江中学校（一時期島根県立第一中学校）の後身・新制県立松江高等学校は、赤山の地即ち「双松」の下を離れたのである。その後やはり過大な生徒数のため、昭和三十六年四月から、新制県立松江高等学校は二分化され、現在の県立松江北高等学校と県立松江南高等学校が誕生した。後者は松江市上乃木町矢の原台地に建設された新校舎に移った。「友情の壮行式」ほか興味あることが「南校」開校に伴い『百年史』に述べられているが割愛する。

ところで、先の「松中創立九十周年記念式典」に話を戻す。「双松会」は「九十周年」を記念して一大記念事業を行うことを決定した。「このことは北高にとっては、『赤山』台地の『双松』に象徴される明治から連綿として築かれた大いなる遺産としての『赤山精神』を再認識してはつきり受継ぐこと」（『百年史』一五八四ページ—一五八五ページ）だったからである。

『島根新聞』の先述の記事は、したがって、誠に重要なものであるので、全部を次に掲載する。

新聞記事では「プログラム」の項で、「9 決議宣言（柴田双松会副会長）<sup>(3)</sup>とあるだけなので、よく分からないが、この「松中創立百周年記念事業」で就中本篇「補遺」にとつて特筆大書すべき最重要事項は、その「決議宣言」である。それは、

「創立百周年までに赤山を松中の伝統を継ぐ教育の場とする」という趣旨のもの。なお「財団法人松中五十周年記念会」を「財団法人松中百周年記念会」に改組して事業母体とする方針である。

具体的に、また結果的にも、それは松江北高等学校を双松の下に戻すこととなった。それから、「二本松の補強工事」、「記念植樹及び記念碑建立」も実施され、後者により「質実剛健」の校訓とその象徴「双松」の関係はより一層明確となった。詳細は『百年史』一五六ページ—一五九二ページ。

「松中」の後継校の一つ「松江北高」の「赤山」移転は、昭和四十六年に決定し、新制松江一中は昭和四十九年新築の外中原校舎へ移転した。しかし、「北高」の「赤山」移転は昭和五十三年まで待たねばならなかった。『松江北高等学校百年史』は昭和五十一年二月二十五日発行されたが、「創立百周年記念式典」は昭和五十三年五月二十一日に行われた。その詳細は『創立百周年記念 松江北高等学校十年史』（昭和六十一年九月一日発行）九ページ—十七ページに記載されている。

ところで、その後、即ち「創立百十年」後に、「双松」に大異変が起った。先に予告として言及して置いたが、「双松」のうち、支柱を必要としなかった方の松が突如枯死の様相を見せ始め、遂には伐採の措置をとらざるを得なくなった。その間の事情を新聞記事によって辿ってみる。

松江北高等学校に保存されている、この件についての最初の新聞

記事切り抜きは、『山陰中央新報』昭和六十二年十月二十二日(木)

(16) のものである。それによると、

寄り添ってそびえているうちの一本が今夏から枯れ始めた。「このままでは青春のシンボルがなくなる」と同校は二十三日、同窓会の緊急役員会を開き、対応策などを協議する。

とある。尚、原因は「松くい虫被害」となっている。このあと、一週間後、十月二十九日(木)、同紙「明窓」でこのことがとりあげられ、同年十一月二十二日(日)、同紙「こだま」に、田中(平?)<sup>(4)</sup> 弑氏(松江市上乃木町 八十歳)の「赤山に育てよう新しい『二本松』」が掲載された。その後の経過については詳かでない。しかし、放置して置くと、残りの一本にも被害が及ぶことは歴然としていたので、遂に伐採と決定した。

双松会は総会(二本松訣別・新生全国大会)の開催を、昭和六十二年十一月十日づけで、会員各位に通知した。「訣別」の式典は、同年十二月十二日(土)、二本松の下で行われた。その模様は、『山陰中央新報』、『朝日新聞』、『毎日新聞』等各新聞の十二月十三日(日)付で報じられている。

「松くい虫被害に遭った」松の「伐採」は翌年(昭和六十三年)

二月十四日(日)に実施され、これについても各紙が報道している。

関連する全記事の紹介は、紙幅の都合上、不可能であるが、先述の記事のほか、特色あるものは後に掲載する。その前に、本章標題の「塩野門之助と『双松会』」に、特に係りのあるものを取りあげ、引用して置く。

… 赤山の二本松は明治三十六年六月、旧制松江中学がこの地に建つて以来の象徴。「朝日たださす双松の…」と同中学以来の愛唱歌『赤山健児の歌』にも歌われて居り、その緑と孤高の姿が質実剛健を表すとされた。同中学中退の若槻元首相は見えていないが、昭和十六年、卒業した竹下さんはこれを仰いで育ったはずだ▼この松はもともとここにあつた旧松江藩士、塩野門之助家の庭にあつたもの。先祖伝来の愛樹なので、切らずにそのまま残すならということで譲らねたいきさつがある。… (前出「明窓」『山陰中央新報』昭和六十二年十月二十九日(木))。

… 二本松はどちらも高さ二五・七メートル、幹の周囲三・三メートルのクロマツ。樹齢は二百年近いとみられている。明治三十年、旧制松江中が同市殿町から移転した時、近くの旧松江藩家老塩野門之助家から寄付された。以来、新制松江高校、松江北高と受け継がれている。… (『中国新聞』昭和六十二年十一月三十日(月))。

赤山に育てよう  
新しい「二本松」  
松江市上乃木町  
甲 乙 80歳  
シンボルだ。

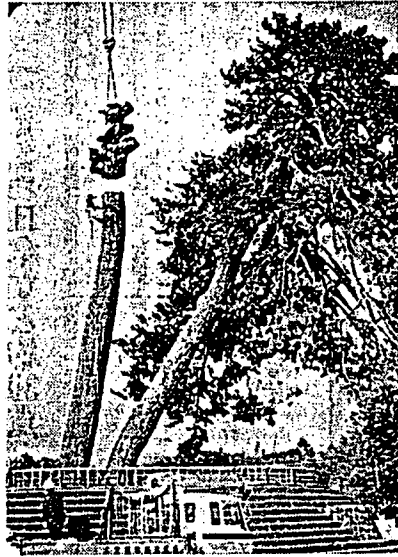
赤山の二本松は明治三十一年、松江市が殿町から赤山へ移転して以来、松江市校が松江北高に寄贈された。この松は、松江市校のシンボルだ。… (以下略)

… (以下略)

# 思い出の300年松を人れ

## 松江北高 二代目に木を移す

旧制松江府時代から、水として扱われてきた松江北高の「赤山の二本松」の一本が、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。



惜しまれながら伐採される赤山の二本松(松江北高で)

松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。

松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。

# 旧制松江中の「赤山の二本松」一本を伐採

旧制松江府時代から「赤山の二本松」の一本が、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。



松江北高の二代目に木を移す

## 松くい虫被害 「青春の思い出切られたよう」

年が経つにつれて、赤山の二本松の一本が、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。

松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。

松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。松江北高の二代目は、松江北高の二代目に木を移す。

昭和63年2月14日

# 樹齢216年 老松消ゆ

## 二本松 伐採 同窓生ら名残惜しむ

松江北高

旧制松江中学時代から「赤山」として親しまれてきた松江市奥谷町、松江北高の二本松が十三日、伐採された。伐採されたのは、松くい虫菌で枯死した西側の一本。名残を惜しんで築まった同窓生が見守る中、高さ十八・五メートル、幹回り三・六メートルの老松は、五時間かかりの作業で赤山から姿を消した。年輪を数えると、樹齢は二百十六年だった。

赤山の二本松は明治三十年六月、旧制松江中学がこの地に建てられて以来、在校生や卒業生に青髯のシンボルとして親



クレーン車でつり上げながら伐採される赤山の二本松―松江市奥谷町、松江北高

しまれてきた。しかし昨年七月末に二本の小枝が折れ始め、十一月に入ると完全に枯れた同窓会「双松会」（柴田え、北高、赤山が幹念になる

午郎会屋）で協議。残った一本を守るため、伐採を決めた。この日、午前九時から同窓生や職員ら約七十人が出席して赤（おの）入れの神札を引く。柴田会長が「二本を切ることは、青髯の思い出を消すり取られる思い。しかし、新しいエポックも芽を發させる。北高、赤山が幹念になる

「薪燵として考えたい」とあいさつ。午前十時から松江市森林組合が作業に入った。午前中に、枝をすっかり切り落として裸になった被虫木を午後一時から伐採。十二・三メートルある太木は、二台のクレーン車でつり上げながらチェーンソーで四つ切に断した。切り取られた被虫木は、青カビで腐菌が繁殖しているもの、直径約一メートルとした風格を調わせ「三

「すが双松」と同窓生らをつなげた。しかし、一本が完全に伐採され、赤山の双松が一本松になると、ほとんどの人が寂しそうな表情を浮かべ、松江中学五十二期卒業生で同窓の校長も務めた松江北高町、兼折助さん（さ）は「窓間が情けないね」とも話した。

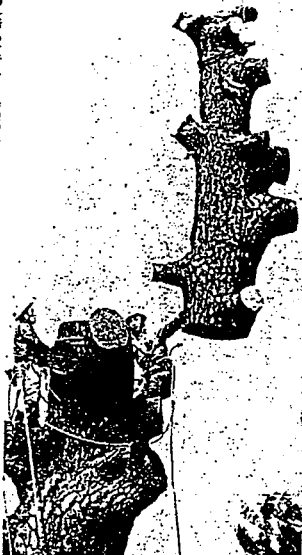
伐採木は、同窓会で記念の表札やついでなどの加工方法を決めるまで製材業者が保管する。

# 青春のシンボルに別れ

## 松江北高「赤山の二本松」伐採



松江北高等学校の卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。この活動は、卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。この活動は、卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。



ロープで体を結びつけ、チェーンソーを使って伐採作業する松江市森林組合員

卒業生ら70人

雄姿 脳裏に

松江北高等学校の卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。この活動は、卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。この活動は、卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。



松江北高等学校の卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。この活動は、卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。

松江北高等学校の卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。この活動は、卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。



松江北高等学校の卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。この活動は、卒業生ら70人が、赤山の二本松を伐採する。



赤山の二本松



庄司双松会々長



藤木双松会副会長（現校長）

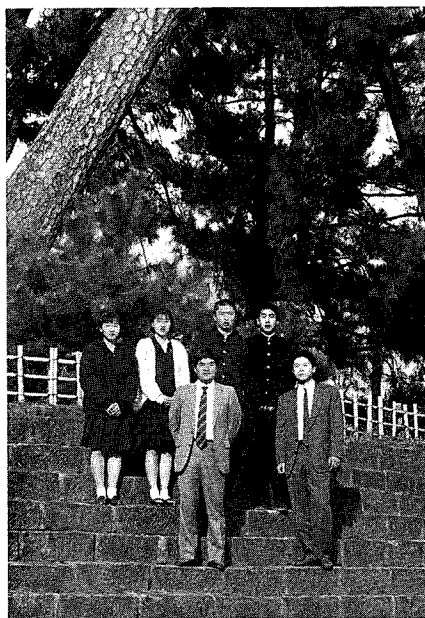


兼折双松会副会長

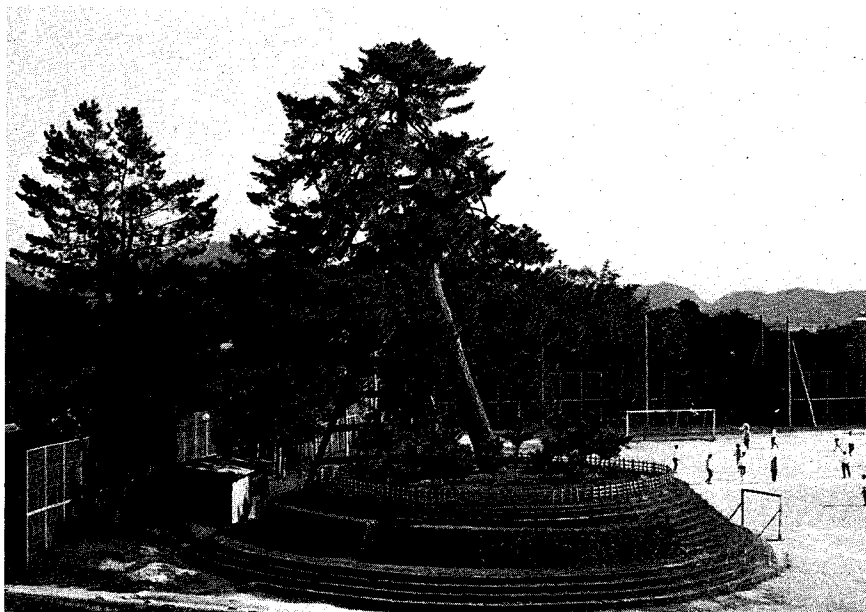


### 老松と双松二世

松江北高、北尾・小林両教諭と在校生  
(安達・小村・津島・新宮) 諸君



小林教諭  
新宮秀知 (一年生)  
津島宏紀 (一年生)  
北尾教諭  
小村春子 (二年生)  
安達明子 (二年生)



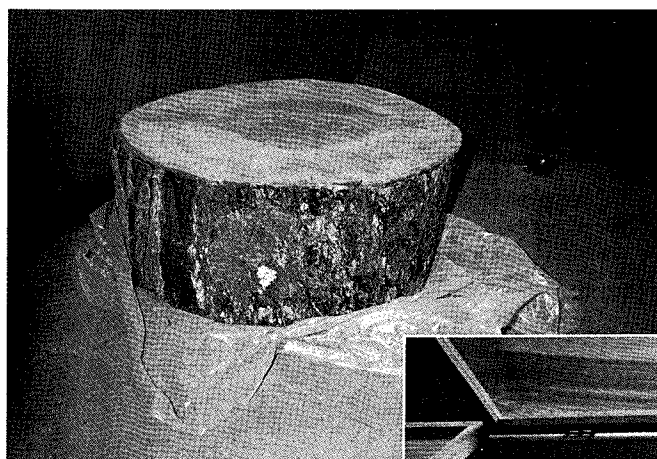
今も生き続ける残りの一本の老松と北高運動場



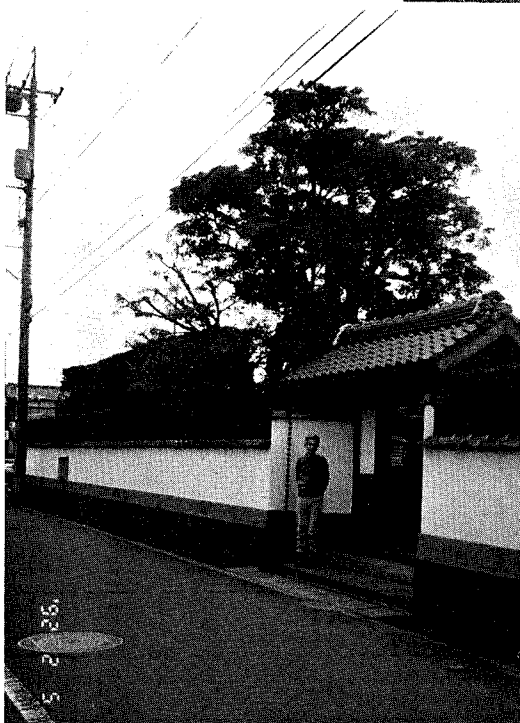
小林教諭



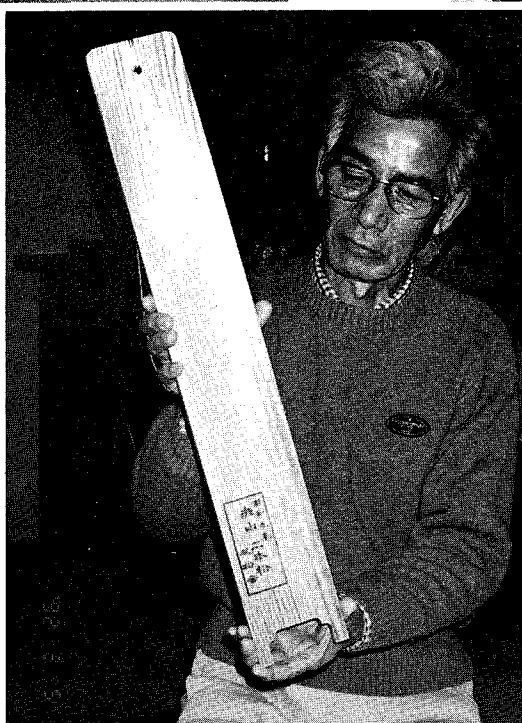
老松と北尾・小林両教諭及び在校生代表諸君



伐採された老松の幹(部分、  
写真左上)と老松で作られた  
板(写真右)



山本英夫氏邸(松江市南田町123番地)



山本英夫氏と伐採された老松で作った短冊

赤山の老木二本松は、松くい虫の被害に遭い、遂に一本となった。この残りの一本も、いつかは朽ちてしまうであろう。生きとし生けるものは、いつかは滅びざるを得ない。ボードレールの詩にあるように、それは、我々の「仇敵」である「時」の仕業である。しかし、生物は子孫を残すことができる。そして、「仇敵」と思われた「時」は新生にも加担する。

塩野門之助がどのような意図をもつて二本松の永世保存を条件として、自分の土地・屋敷を島根県に譲ったかは明らかではない。しかし、稿者の推測するところ、限りある命を持つ松そのものの永世保存を意図したのではないであろう。松を介して相伝し得る、或いは「伝統」であろうし、「節操」であろう。また、校訓となっている「質実剛健」であろう。さらには、塩野門之助自らが手本を示した「進取」の精神であろう。稿者としては、この最後のものを特に強調したい。塩野門之助は未だ明治も一けたのうちに、万里の波濤を越えて、異国フランスに留学し、その頃日本人では学ぶ者の非常に少数であった、鉱山学、冶金学を修得して帰国したのである。今流行の「海外旅行」とは比較にならない、これは壮挙であり挑戦である。

「伝統墨守も大切であり、「質実剛健」は美德である。しかし、「双松二世」は、それらと共に進取の気象を培うべきであり、未来への挑戦を心がけるべきであろう。それは、「言わずもがな」で、これまでも実行されてきていると思われるが、確認の意味もあつて、「双松」の若木と「双松会」の新会員となる人々、そして、その両方を育てる役割を荷う方々も、象徴的に、代表として、この「補遺」に収録

させて頂くこととした。塩野門之助はじめ、関係諸氏のすべてに、稿者のこの我俣を赦して頂きたい。

### 三、塩野門之助令孫・井田康子氏手記

この度、「補遺」上梓に際して、塩野門之助唯一の令孫・井田康子氏に一文を草して頂いた。左にそれを掲載する。



井田康子氏

祖父のことども 井田 康子

学齢前に二・三ヶ月、老松町の母の里、塩野に預けられ、祖父の生活をつぶさに見た。特製の低いベッドで、朝目覚めのコーヒーを飲む。「お顔を洗わないで？」と祖父を苦笑させた。当時としてはハイカラな食事。用事以外ではフランス語の書物を読み、殆ど毎日来る植木屋に「金太郎、その枝は……」などと窓を開けて大声で指図し、大体一日が暮れる。

衆議院議員の父にはひつきりなしの客があり忙しさにまきこまれ、兄達と遊ぶ日々比し、静かでのんびりしていた。遊び相手が居ないので、美しく手入れされた庭の木立をぬい、門からの道の両脇の龍のひげの実をとったり、屋上に出て富士山を眺めたり「おてんばして怪我するな」と時には祖父が注意。寝室のカーテンの隙間から星空。「ツインクル ツインクル リトルスター ハウアイ ワンダー ホアッチューア」と母の優しい声を思いつつ私の一日も暮れ

る。(母は日本女子大英文科二回卒業生)

住友退職後の平穩無事の祖父の生活。敬叔父がなくなり、静叔母は浦澄江の任地。祖母とお手伝いと、変化の少い日々である。木造二階建の和洋折衷の耐震構造の家だけが、今は残り、曾孫の野原家が住んでいる。祖父が丹精こめて手入れをした庭は跡かたもなく、びっしり家が建ち並んでいる。後継の一郎が人に欺されて次々と地面を分割せざるを得ず……。

祖母が幼い私に問わず語りにいろいろ話をしてくれ、フランスには祖父は初め松江藩から維新前に、二度目は住友から行き、帰りアメリカにも立寄り、住友では四阪島の仕事が終了した時、住友は残留を希望してくれたのに退職。その後、東大からも講義をしてくれるよう招請があつたのに頑固に何処にも就職を拒んで、今のよう到庭の造作に専心、無為の毎日であるなど、妙に記憶に残っている。

後で知つた事であるが、苦心して造つた精錬所が煙害を出したので、潮流の研究はしたが、一年中の風向に万全の注意を払わなかつたのを残念に思い、人間の為事に疑問を持ち、仕事はすべて辞退した心中が私なりにわかつた。

フランスは愛していたようである。文化の落差を維新前、明治初年ではひどく感じたであろう。祖父から余り聞かなかつたが、生活を共にし、幼いながら自然わかることも多かつた。父が病気で第一線を引退し、小学校四年に帰奈したので、それ以後は稀にしか会えなかつた。話のわかる年令だつたら、話したい事も祖父には沢山あつたろうと思う。

小学校で四阪島の銅精錬所が東洋一と教えられ、そんな大仕事を

したのかと、驚いた。

祖父の部下の島川実様が在阪で来られては、「塩野先生」と親しみ尊敬して下さつた。

東京に寄墓を作つたが、母は祖父が菩提寺の和尚さんは欲ばりでいやだから神社神道に変わり、墓の下深く伝来の家宝は埋めてしまったと語つた。もう六十年以上経つから、すべて土に化していいよ。その中で祖先の蘭亭が註をつけた漢籍は何か惜しまれる。

松江北高校に祖父の愛した老松が残り、大事にして頂き、生ぶ湯の井戸も残つており、松江の方々の御心を嬉しく思っている。勝手門と家のみ残る現状は侘しい。以上

(追記)

祖父の甥故加藤繁(東大教授、文博、東洋経済史)が祖父母、母も触れなかつた親類の事など、母の死後手紙してきた。本郷家加藤家その他について。戦前でその手紙がどこかにまぎれこみ、一寸探したが見付からず、今回は間に合わず、いずれ見付け次第、報告した方がよい点があればお報せ致します。

四〇七日にかけ日本語音声と日本語教育の国際シンポジウムに出席、八日は短大入試採点と、暇がなく、シンポジウムの昼食時に走り書きしましたので、誠にお粗末で恥ずかしゅうございますが、お許しを。

『百年史』三四二ページ―三四三ページに井田康子氏が坪倉久米さん宛で出された手紙(昭和四十九年十月十九日付)が掲載されている。

『創立百十周年記念 松江北高等学校十年史』十六ページに「双松と祖父」と題された、同氏の回想（『生徒会誌』第十八号昭和五十二年度に掲載のもの）が転載されている。

尚、井田康子氏は現在奈良佐保女学院短期大学教授（初等教育学科所属）「文学」と「教材国語」を担当。ゼミは「源氏物語を読む」。このほか、女性市民のための講座も学外で開いて居られるとのことである。本篇「補遺」掲載の内「追記」は稿者宛私信の部分である。

#### 四、塩野門之助縁者等の写真

塩野門之助の母・菊の実家・山本家とは稿者は今年一月に連絡がとれた。しかし「事績」は既に印刷所にまわされていた。従って、山本家より拝借のものを「事績」に加えることはかなり困難であった。また、井田康子氏、野原洋子氏より、その他の親類のこともうかがったが、前篇には間に合わなかった。

野原家の好意でコピーさせて頂いた住所録も、松平直亮 四谷区元町とか、竹内平太郎 松江奥谷六四 伊庭貞吉 滋賀県蒲生郡武佐村字西宿といった、稿者がこれ迄に得ていた知識でどうにか推測できる人々の氏名住所をそこに見出すと、なるほど、こうした人達と文通して居られたのか」と或る種の感慨が稿者にも生じ、また、興味もおこさせてくれる。しかし、当初は、塩野家ゆかりの人達についての知識は皆無に近かったので、たとえば、加藤繁とか上村耕作、浦シヅというような氏名が書いてあっても、殆ど何も分からなかった。

井田、野原両氏のおかげで、現在は塩野家縁者について稿者の知識も増えたので、上村ステキク 奈良市東城戸町三十番地 山本耕一 松江市南田町一二三 などの記事を見出すと、「なんだ、これは井田氏の御母堂や山本英夫氏の御尊父のことではないか。住所も現在の井田氏や山本氏の住所と全く同じではないか」とはじめ分からなかったのが可笑しいくらいである。上野富太郎 松江市津田村などと書いてあるのに出くわすと、先に引用した矢部氏の書かれていたことを思い出して、「はっ」とさえる。

勿論、まだまだ知らないことが多いので、折角の資料も何の役にも立てられないであろう。しかし、島川実 大坂西区立賣堀北通四丁目と書いたのを消して、大阪東成區勝山通五丁目五八四二番地と書き直されているのを見ると、未だ存命なら、島川氏に会っていろいろかぎたいものだと思うぐらいにはなっている。島川実氏の写真は「事績」に載せてある。写真の裏に、塩野門之助閣下 門弟島川實と書いてあったので、塩野門之助を非常に尊敬している人物だとは想像していた。井田氏の御教示により、四阪島時代の部下であることが分かった。塩野門之助の前に出ると平身低頭していたそうである。銅に関係する商売を後にしていたということなので、彼にとって塩野門之助は神様の次ぐらしいの存在であったのかもしれない。

これからも、より多くの門之助ゆかりの人々のことが分かっていくことが望まれるが、今回は山本家当主英夫・美穂子夫妻そのほかの人々の写真を次のページに掲げる。野原洋子氏は辞退されたので、代りというに変だが、稿者が野原綾子氏と写っているのを載させて

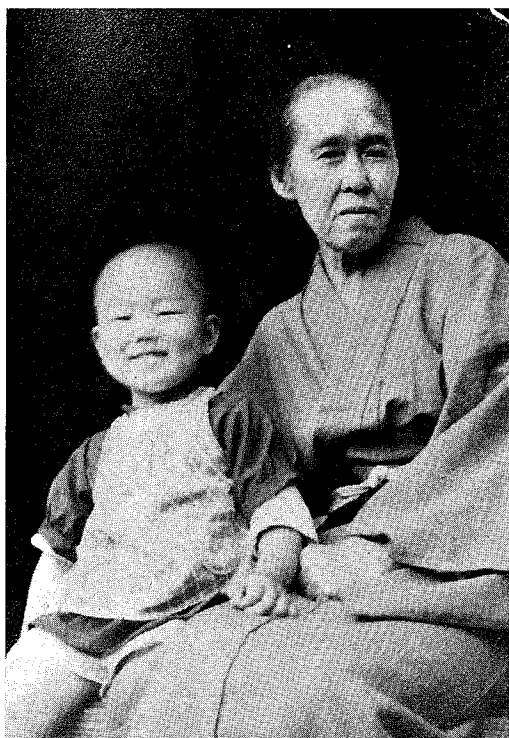


頂く。氏は昨年夏まで塩野門之助のいま一人の令孫であった。



稿者と

野原綾子氏



三島祥生氏(幼年)と祖母イシ(右)



山本英夫・美穂子夫妻



熱田イシの母親？ 熱田イシ



三島（旧姓熱田）イシ



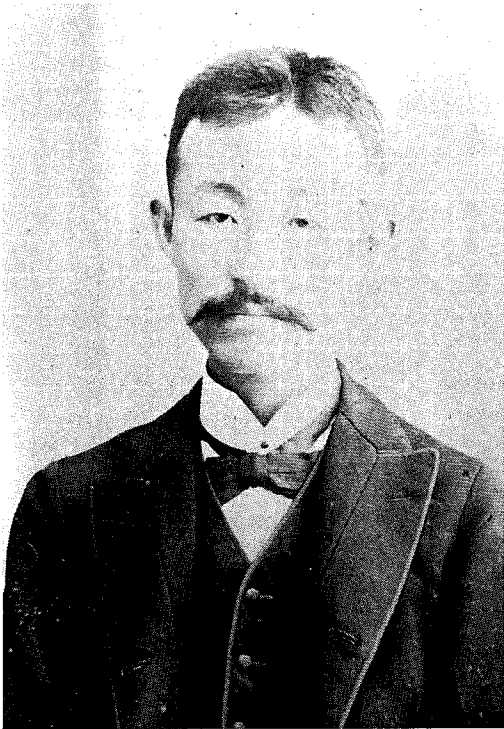
捨菊 <sup>おきわ</sup>理 塩野チカ



加藤氏 本郷氏 塩野キク 塩野捨菊



塩野 おきむ 理



島川 実氏



野原家蔵フランス人形

# 明治期 別子銅山近代化の恩人 ルイ・ラロック氏の写真見つかる！



別子銅山記念館館長 井上 省二

ブルノー・ルイ・ラロック氏。



▲写真に添付された広告名刺。  
(訳) フランス各教会・各学校・医学校御用達。写真師  
エール・プティ・パリ、カデ  
ット広場。ラロックより。  
塩野門之助様へ。愛憎に満ちた思い出を持ちつつ、  
1881年8月28日パリにて  
写す。)

2月の中旬、本社会議事業本部営業第一田中部長から、ルイ・ラロック氏の写真の複製が、小林忠雄さんの好意で寄せられたのでお送りします。このお話をいただきました。

ブルノー・ルイ・ラロック氏は、明治7年3月7日、別子銅山支配人広瀬善平の求めに応じて通訳・塩野門之助氏と一緒に来山し、2年近い調査・測量の末、「別子山の鉱山および治産に関する報告書」という膨大な近代化計画書を寄りました。このいわゆる「目論見書」によって別子銅山の近代化がすすめられ、今日の住友商事繁栄の基盤ができたのです。

広瀬支配人は、この「目論見書」の完成を、「千歳之後楽ヲ祝シ申候」と喜び、彼のことを、我が鉱業上大

功ありて一過なかりし人なり」と自伝「半生物語」に書きとめています。しかし、その寄附については、今までまったく知るすべもなかっただけに、夢のよき話でした。いたたたいた写真は早速複製拡大をして目論見書「ラロック」にあわせて別子銅山茶館に展示しました。

別子銅山の近代化計画  
明治の初め頃は、別子銅山の他は官営でした。明治4年4月、広瀬支配人は工部省鉱山掛に任命され、官営別子銅山動役を命じられました。そこで工部省のフランス人技師コワニエの経営近代化への指導を受けて、別子銅山の近代化を思いあわせ、将来を憂慮して近代化の必要性を痛感したのです。明治5年6月、工部省から外国人による民営鉱山視察の特別許可を受け、コワニエを別子銅山に

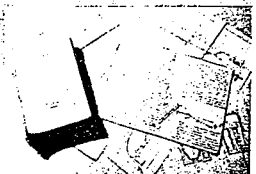
た。写真は松江市の「野家」に保管されて、同じ日本仏学史学会会員である鳥根仁彦の田中隆二教授が借り受け、これを同学会々々員である日本大学の清川産教授が複製をし、それを小林氏が出版の援助の御礼として、別子銅山記念館にラロック氏の写真がなければ、ぜひ掲示してほしいと、同教授から譲り受けたものです。  
小林氏には、心から御礼を申し上げたいと思います。

別子銅山記念館  
別子銅山茶館は、別子銅山の意義を水々後々に伝えるために、住友グループの協力によって建設されました。館内には銅山開坑以来の歴史資料が展示されています。

開館時間 午前9時～午後4時  
休館日 日曜日、祝日、年末年始  
入館料 無料  
住所 愛媛県新居浜市南郷新田  
電話 0997-41-1100



▲ラロック氏使用のトランシット



▲「別子鉱山目論見書」 本項全314号、付録編14号、付図25号などからなる大部なもの。



▲東延斜坑機械場



▲東延坑内部。別子銅山目論見書。ラロック氏の設計どおり施工されている。

案内して近代化への提言を得ました。その具体化については、当時取引関係のあったヘビ・リリエントール商会に相談し、技師ルイ・ラロック氏を紹介されたのです。

ルイ・ラロック氏は、パリ鉱山学校を卒業したとりのサンティアゴ大学の化学教授を務め、別子への来山当時は39才でした。彼は地形や鉱石の賦存状態、質の良悪などあらゆる調査・測量を行って、合理的な採掘・搬出・製錬・輸送を八項目からなる計画案をつくりましたが、その実現のための費用は約百万千円で別子銅山の7年分の利益に相当するものでした。

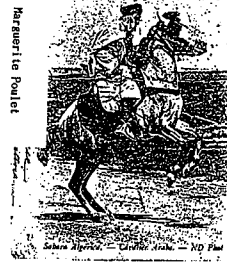
彼は、この大事業を完成するためには、この莫大な費用を賄う現在の採行を阻害してはならない、これを念頭において実現可能な具体案をつくったのです。それは、

東延に斜坑を設けること、そして、密坑で粗製錬をし、これを山越えの車道を作って運ぶことなど、当面の地点を山の中に置くこと、現実的であるやかな改革で

した。  
明治9年4月、塩野門之助氏は広瀬支配人の許可を受け、我が國の民間鉱業初のフランス留学生として探鉱・冶金技術修得のためパリに行きますが、この時もルイ・ラロック氏は先生や学校の紹介など親身に世話をしてくれました。技術の習得を果した塩野氏は、帰国後、開洋式製錬所や四反島製錬所の建設に大きく貢献しましたが、全面的ルイ・ラロック氏の写真は添付されている彼のサインから、パリで写し、帰国直前の塩野氏に記念として贈ったものと思われる。

### ■写真入手の経緯

仲介の労を預った小林忠雄氏は現在85才、日本仏学史学会々員で、氏は昭和14年にニエトカレドニア島のニッケル鉱山に勤めたあと、伊豆の上野金山の取締役総務部長として勤務され、第二次大戦後、ニエトカレドニア島の日本人「契約移民」を著しました。今年6月、同島では移民10年の記念事業として、在島三世のために、これをフランス語で刊行する運びとなり、当社が出版を援助する運びになったのが契機となりました。



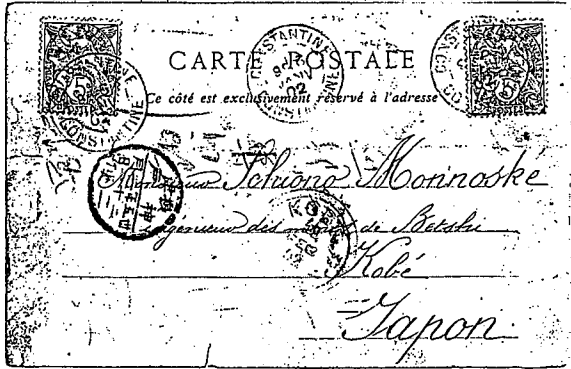
Constantine le 6 Janvier 1902

Monsieur

Je suis la fille d'un de  
vos anciens de St Etienne (promotion  
de 1876) j'avais pour parrain feu Ni-  
colas Mercier votre camarade (promo-  
tion 1880). J'ai 17 ans et je serais  
désireuse d'échanger des cartes illus-  
trées avec une de vos parentes du même  
âge.

Recevez mes sincères salutations.

Marguerite Poulet



CARTE POSTALE

Ce côté est exclusivement réservé à l'adresse

Monsieur Schiono Mennoské

ingénieur des mines de Betshi

Kobé

Japon

五、知人からの手紙など

上掲のハガキはマルグリット・ブレという十七歳の少女から、塩野門之助宛神戸に来たものである。住所(県、市名、番地)が記されていないのに、よく届いたものと感心するが、別子の塩野門之助とわかれば、なんとかなったのであろう。

活字にしたものを添えて置いたので、フランス語が少し分る者ならば、誰でも理解できる内容である。要するに、門之助の親類(できれば娘だったであろう)の女の子でペン・フレンドになつてくれる者を求めたものである。内容はとりたてていうほどのものではないが、手蹟がきれいなと十七歳の女性からのものであること、このハガキしか外国(フランス)人から来たハガキはないので、掲載した。

次に収録する手紙は、上のハガキの差出人同様、門之助がサン・ティエヌに留学していた時のクラスメイトの関係者からである。

こちらはジョゼフィヌ・コルビエールという年輩(と想像される)婦人からである。彼女の夫・ジョゼフ・コルビエールが、サン・ティエヌ鉱山学校で学友だったのである。書き忘れていたが、マルグリット・ブレはやはり門之助の学友であったニコラ・メルシエを代父としていたのであった。

マルグリットのハガキと異り、ジョゼフィヌの手紙は、夫を亡くした婦人のわびしさがにじみ出ている。塩野(野原)家に残されている人形が彼女の書いている人形かどうかは不明。綾子氏は「ナポレオン三世から頂戴した。」と祖父門之助から聞いていたそうであ

La Chambre 21 Aout 1909

Cher Monsieur Schone.

C'est la femme de votre niece comme  
votre cousin qui vous écrit, et votre sis-  
sine doit être grande. Hélas! mon pauvre  
mari est mort il y a 3 ans après une  
maladie de plusieurs mois. Hélas, il me  
semble que j'ai tout de la famille de ses  
amis, de ceux qu'il aimait davantage  
surtout. C'est pourquoi après une absence  
insupportable dans nos relations, j'ai essayé  
de retrouver votre adresse.

Surement Joseph Schone doit être  
mort pour un fils en carrière et il en avait  
de la femme beaucoup de femme.

Est-ce moi qui s'en vont retrouver, ou  
pas malade, qu'on me le dit.

J'ai maintenant devant moi tout  
est tant d'efforts faits et plusieurs que vous  
venez de me dire et qui lui étaient si chers!  
Mais moi il me faut la valeur de plusieurs  
d'efforts, et j'y tiens infirmité.

Dans cette lettre de 1887 vous étiez encore chez  
M<sup>rs</sup> Bonimont, et nous parlez beaucoup d'affaires  
carrées. Joseph s'occupait aussi à ce moment-là  
mais rien n'a abouti. En 1895 il a quitté la St-  
Etienne de St-Jean de Maurienne pour en mener  
une <sup>autre carrière</sup> tout près de là, à la Chambre où je lui restai.  
Il a eu beaucoup de débordement avec cette exploitation  
et les soucis, les soucis de ses affaires ont fait être  
bien compliqué une maladie des reins qu'il avait  
depuis 1887. De ses amis communs, Chabaud  
est celui que nous voyons le plus. Chacun  
il nous venait quelquefois, et toujours on parlait  
de vous. Je suis resté en relation avec lui et  
nous nous voyions le temps au temps. Mais  
mon Joseph s'est fait avant sa mort et ce  
triste souvenir commun est entre nous

Alors, je ne vous demande de vous en  
vous avez pas oublié? Et votre famille s'est  
supprimée depuis votre voyage en France?  
Avez-vous un seul fils comme vous le  
père? Sans doute votre "Sticks" est  
marié! Sub-est-il un grand père!

Il n'est rien. Pas d'enfant jamais.  
C'était notre chagrin à tous les deux, vous  
le savez. Et maintenant c'est avec la  
douleur de ma solitude.

Mais les jours passent que tout se  
brûle et on ne peut pas aller au bout  
de cette vie de misère et de peine pour  
devenir toujours et oublier ce qui fait mal!

Allant, ordinaire remontant les  
années jusqu'à votre dernière lettre:  
13 Mai 1887. Je lui ai toutes vos lettres,  
tout le dossier Schone que Joseph avait  
rangé pour le rendre à son aise et que

lui en plus.  
Joseph en 1896 avait pu savoir que vous étiez à  
Albino, dans le Kau de Cochep. Il n'en  
a écrit, mais pas de réponse jamais. Sans doute  
ses lettres ont été égarées. Mais je n'en suis  
pas le tort de celle-ci encore! Je n'ai de votre  
depuis ou j'ai reçu une lettre de vous.

En 1889, voyant que vous ne veniez pas en  
France comme nous l'avions annoncé à votre précédent  
voyage, nous attendions encore pour votre petite fille  
une grande promesse, telle que les belles fiançailles  
nous devaient de tout nos efforts pour empêcher d'af-  
ficher votre Sticks à la fiancée. Mais nous  
n'avons rien! Peut-être s'est-elle perdue autre.

Quand nous le pourrions, mon cher Schone,  
écoutez-moi, si je vous reverrais quelque fois,  
nous reverrions un peu cette amie évanouie,  
mais hélas, parce que j'ai eu de Joseph, je  
me suis ennuie avec votre neveu camarade.

En attendant, avec l'indulgence de toute ma  
sympathie, recevez mon meilleur souvenir.

Josephine Coobier

La Chambre (Savoie)

塩野門之助 事績と資料 補遺

田中隆二



! La Chambre, ce 25 Août, 1909

Cher Monsieur Schiono,

C'est la femme de votre vieux camarade Corbière qui vous écrit, et votre surprise doit être grande. Hélas! mon pauvre mari est mort il y a 3 ans après une maladie de plusieurs mois! Mais, il me semble que je suis de la famille de ses amis, de ceux qu'il aimait davantage surtout. C'est pourquoi après un arrêt inexplicable dans nos relations, j'ai essayé de retrouver votre adresse.

Souvent Joseph disait: Schiono doit être mort pour ne plus m'écrire, et il en avait de la peine, beaucoup de peine.

Et voici que l'on vous retrouve, ou du moins qu'on me le dit. Alors je viens vous demander si vous ne nous avez pas oubliés? Si votre famille s'est augmenté depuis votre voyage en France? Avez-vous eu un fils comme vous le désirez? Sans doute votre "Steiko" est mariée! Peut-être êtes-vous grand-père!

A nous rien. Pas d'enfants jamais. C'était notre chagrin à tous les deux, vous le saviez. Et maintenant c'est encore la douleur de ma solitude.

Mais les jours passent. Qui sait si bientôt nous ne serons pas aussi au bout de cette vie de misères et de peines pour dormir toujours et oublier ce qui fait mal!

Allons, ensemble remontons les années jusqu'à votre dernière lettre: 12 Mai 1887. Je les ai toutes vos lettres, tout le dossier Schiono que Joseph avait rangé pour le relire à son aise et que j'ai maintenant devant mes yeux.

Et tant d'objets jolis et précieux qui nous viennent de vous et qui lui étaient si chers.

Pour moi ils ont toute la valeur de souvenirs d'affection, et j'y tiens infiniment.

Dans cette lettre de 1887 vous étiez encore chez Mr. Soumitomo, et vous parlez beaucoup d'affaires de cuire. Joseph s'en occupait aussi à ce moment-ci, mais rien n'a abouti. En 1895 il a quitté la Ste de Plafres de St Jean de Mauisienne pour en monter une autre concurrente près de là, à La Chambre où je suis restée. Il a eu beaucoup de déboires avec cette exploitation et les soucis, les ennuis de ses affaires ont peut-être bien compliqué une maladie des reins qu'il avait depuis 15 ans! De vos amis communs, Chabaud est celui que nous voyions le plus. Chaque année il nous venait quelques jours, et toujours on parlait de vous. Je suis restée en relations avec lui et nous nous écrivons de temps en temps. Il a vu mon Joseph 15 jours avant sa mort et ce triste souvenir commun est entre nous un lien de plus.

Joseph en 1894 avait pu savoir que vous étiez à Ashio, dans le Ken de Tochi gi. Il vous a écrit, mais pas de réponse jamais. Sans doute des lettres ont dû s'égarer. Pourvu que ce ne soit pas le sort de celle-ci encore! Je serai si contente le jour où je recevrai une lettre de vous.

En 1889, voyant que vous ne veniez pas en France comme vous l'aviez annoncé à votre précédent voyage, nous vous avons envoyé pour votre petite fille une grande poupée, habillée comme les bébés français, nous souvenant de tous nos efforts pour essayer d'affubler votre Steiko à la française. L'avez-vous reçue! Ou bien s'est-elle perdue aussi!

Quand vous le pourrez, mon cher Schiono, écrivez-moi et je vous reviendrai quelques fois. Nous renouerons un peu cette amitié ébauchée, mais très vive, parce que, à cause de Joseph, je me crois moi aussi votre vieux camarade.

En attendant, avec l'assurance de toute ma sympathie, recevez mon meilleur souvenir.

Joséphine Corbière

La Chambre ( Savoie.)



等学校長)にいろいろと教えを受け、本篇で塩野門之助と「双松会」のことを大々的に述べる事ができて、稿者は喜ばしく思っている。兼折氏はじめ、「双松会」及び北高関係者の御好意に感謝申しあげ

四〇ページ「写真入手の経緯」の「松江市の塩野家」は「東京の野原家」の誤り。

最後に、稿者と同窓の藤木現北高校長、かつてフランス語勉強会で顔を合わせたことのある、双松会員で現在北高で教鞭をとっている北尾教諭、島根大学で稿者が卒論を指導したということで、今回大いに協力をして下さった小林教諭に、北高の先生方の代表として象徴としての「双松二世」は勿論、世界にはばたく「双松会員」の若人を育成して下さることを願って稿者は筆を擱く。塩野門之助翁の方は、ただ「ギョロツ」と眼玉を動かして、何も言わずに稿者を一べつするに過ぎないであろう。或いは一顧だにされないかもしれない。三島武氏によると、非常に変わったお人であつたらしいから。

注

- (1) 以下「本邦民間鋳業初の海外(フランス)留学生」松江出身の住友別子銅山・鋳山技師 塩野門之助 「事績と資料」は単に「事績」と略記する。
- (2) 『松江北高等学校百年史』(昭和五十一年二月二十五日発行)以下「百年史」と略称する。
- (3) 『百年史』では馬場副委員長。
- (4) 『島根新聞』の他の記事では「田平式」。

付記